

隨泉寺寺報

平成28年（2016年）6月号 第550号

Tel.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

前期門信徒講座

講師 法明寺住職 原田 真澄師

講題 『聞くところを慶び・・・』

【門徒もの知らず】という言葉について考えてみたいと思います。どうやら「門徒物忌み知らず」が変化したもののようにです。

まず、「門徒」というのは、一門の徒輩（浄土門、他力の道を歩む仲間）という意味で、阿弥陀如来様の救いを信じる、浄土真宗の信者であることを指します。隨泉寺の門徒ですといえば、浄土真宗のお寺の信者であることがわかります。

次に「物忌み」とは、災厄や、霊鬼から身を守るための行いのことをいいます。迷信・俗信の類です。日がいいとか悪いとか、方角がどうの、語呂が悪いとか・・・。

迷信

浄土真宗では、亡くなられた方を仏さまと仰ぎ、その死をケガレとは考えません。ですから、昔から浄土真宗のご門徒の方々、この「忌み事」を必要のないものとしてきました。そのため

浄土真宗以外の方々から「門徒物忌み知らず」と呼ばれるようになりました。

6月の法座予定

- 6月 2日……………本部役員会
- 6月 9日午前9時より……………掃除 平原上第2
- 6月 15日朝席午前10時より……………お父さんの集い お齋
- 6月 15日昼席午後1時より……………前期門信徒講座
- 7月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会

☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

—浄土真宗一口法話— 6月

「私は しばしば仏を忘れるが 仏は私を忘れない」 (金井隆久)

◆私たちは、多く、幸せを願って生きています。政治や経済それに、科学技術もそのためにあると言えるかもしれません。しかし、その願いを断ち切るのが、死ぬこと、死でありましょう。先日の脱線事故のような不慮の死はまことに悲惨です。自分たちの願いを積み上げていっても必ず幸せになれるとは限らないことを教えられます。 ◆仏教の根本姿勢は物事をありのままに見るところにあると言えましょう。それは必ずしも、私たちの願いにかなうことではありません。



誕生があれば、老病死があること、安心があると、次の不安が生じることです。そうであるからこそ、阿弥陀如来さまは、こちらから助けを求めて行った先に、待っていてくださるのではなく、既に今、私の後ろから、足下から、照らし支えていて下さいます。 ◆日々の暮らしの様々な場面、嬉しいこと、辛いこと、悲しいことがあった時、阿弥陀如来さまのお

心を思い起こし、受け止め味わってゆくのです。 ◆南無阿弥陀仏とお念仏申す時、私一人ではなかった、御同朋がいてくださり、阿弥陀如来さまがいてくださることを思い起こし、生きる意味や喜びを知るのです。

「七仏通戒偈」

諸悪模作 衆善奉行 自浄其意 是諸仏教 【涅槃經】

◆仏教の教えとは、一言でいったらどういうことか。それは、悪をなさず善をなし、自分の意（こころ）を浄くすることである。なんだ、そんなことか、そんなことなら三歳の子供でも知っている。 だが、三歳の子供でも知っていることを、本当にできる人がどれだけいるのか。

◆タバコが健康に悪いことは、知っている、だがやめられない。悪口が悪いことであるのはわかっている。だがつい口をついてでる。

◆法句經に「善からぬこと、おのれのためにならぬことはなし易い。ためになること、善いことは、実にきわめて作（な）し難い。の言葉がある。

◆三歳の子供でも知っている道理を実行できない私の現実がある。

「よろこび」の種をまこう

私が中学校の校長を勤めさせてもらっていた頃のお正月でした。例年のように「おめでとうございます」の会を開きました。そのとき、私は、「大黒さまは、いつ見ても背中に大きな袋をかついでいらっしゃる。そして、いつ見てもニコニコしていらっしゃる。生徒の皆さん、あの袋の中には、いったい、何がはいつているのだろうか。いつもニコニコしていらっしゃるところをみると、だいぶ、いいものはいつているにちがいないのだが、何がはいつているのだろうか?」と、質問しました。一斉に手があがりました。一人の生徒を指名しますと、「きっと、お金がたくさんはいつているのだと思います。だからあんなうれしそうな顔をしていらっしゃるのだと思います」「ほかの考えの人はいませんか?」と、尋ねてみましたが、一人も手をあげる生徒はいませんでした。みんな、一人残らず、お金がはいつていると信じているようでした。



「そうかもしれないね。あんな大きな袋にお金を入れたらずいぶんたくさんはいるだろうな。だからあんなうれしそうな顔をしていらっしゃるのかもしれないね。だけど、ずいぶん重いだろうな。かついだときは嬉しかったろうが、その重みがだんだん肩に重いこんできたら、しかめっつらになってくるのではないだろうか。だのに大黒さまは、いつもニコニコしていらっしゃる。ひょっとすると、お金ではないかもしれないよ。お金でないとするとなんだろうか?」と、問いをまた生徒に返しました。いつまで待っても手があがりません。その中、生徒の一人が、「校長先生は何がはいつているとお考えですか?」と、逆襲してきました。

「さて、わたしにも確かなことはわからないが、ひょっとすると、あの中には『よろこび』がはいつているのではないだろうか。だから、あんなに嬉しそうな顔をしていらっしゃるのではないだろうか」と、答えました。そして、「わたしたちは、みんな、それぞれ、背中に一つずつ袋をいただいているのではないだろうか。そして、しあわせな人というのは、背中にたくさん『よろこび』を貯えている人のこと、不幸な人というのは、背中の袋に、不平・不満・愚痴を入れて背負っている人といえるのではないだろうか。



お互いに、きょう、こうして新しい年を迎えたわけだが、何とか、今年という年

を、光いっぱいにするために、『よろこび』をいっぱい袋に貯える年にしようじゃないか。ところが、わたしは町の大売出しの福引き券をひいても、マッチの小箱くらいしかあたったことはない。わたしはどうやらそういう宿命を背負っているらしい。だから『大きいよろこび』とは無縁らしい。そこで、考えた。みんなが拾い忘れている『小さいよろこび』をたくさん貯えることにした」と、宣言したことでした。

《お父さんの集い》 6月15日午前10時より

6月の第三日曜日は父の日です。誘い合わせてどうぞお参りください。

酒など冷やせと仰せられ候 ～蓮如上人のお言葉～

六月の第三日曜日、いわば父を讃える日。「讃えられるようなことは別にしないよ。ごく普通の親父だね」と謙遜することはないのです。偉い親父でなくても、父親であることに変わりはないのですから。誰もが例外なく父親のイメージを持っているはず。頑固な父・まじめな父・頼もしい父・怖い父・優しい父・元気一杯の父・疲れきっている父・厳しい父・おもしろい父・友達のような父・働き蜂のような父・・・人さまざまに父親の思い出もあるでしょう。かつて、怖いものの代名詞に「地震・雷・火事・親父」といわれていました。今では「地震・雷・火事・女房」と変化していて、父権喪失の時代だといわれます。



6月15日の朝席は【お父さんの集い】です。ここ2～3年お父さんのお参りしてくださる人数が少しですが増えてきました。嬉しいことです。誘い合わせてくださるからでしょう。お昼の【お斎】の時少しだけお酒も出します。

『蓮如上人御一代記聞書』という書物の中に、蓮如上人のこんなエピソードが書かれています。「寒空の中にお寺にお参りされた方々には、お酒をカンしてさしあげて、道中の寒さをしのぐように。また炎天下の中にお寺にお越しくくださった方には、酒を冷やしてお出ししなさい」と、お寺にお参りになられた方々に、大変気配りをされておられたそうです。このエピソードは、蓮如上人が僧侶も在家も関係なく、同じ親鸞聖人の教えに集う仲間として、ご門徒様を大切に思っておられたお姿がうかがえる内容です。それは、なによりもまず、ご門徒様がお寺に足を運んでくださることを喜ばれたからです。皆様と共にお念仏を喜ばせていただきたいものです。 合掌